
IS インフィニット・ストラトス ～運命の紅い翼～

ザヴァーン軍曹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 〈運命の紅い翼〉

【Nコード】

N9639R

【作者名】

ザヴァーン軍曹

【あらすじ】

メサイア攻防戦。

アスラン・ザラによって倒されたシン・アスカは謎の光に包まれ、目が覚めると——女尊男卑の世界に来ていた。

彼はこの世界で成長する事が出来るのか？

PHASE 1 運命と正義と（前書き）

一時のテンションで書いてしまった。

反省と後悔しかしてない。

恐らく一定の話を投稿したら亀更新になりやす。

あと、作者は素人です。

書き方が変だったたり、間違った所が有ったら五気軽に指摘して下さい。

（、・▽・、）ノヨロシク

PHASE 1 運命と正義と

地球から遠い遠い宇宙^{そら}。反射衛星砲『レイクエム』の周りで二つの光がぶつかり合う。

「シン！ やめろ！ そんなものを守って戦うんじゃない！！」

薄い赤色の装甲を持つ機体、インフィニットジャスティスを駆る男、アスラン・ザラは目の前の機体、デステイニーのパイロット、シン・アスカに向かって叫ぶ。

シンはこの言葉に心底腹が立った。何も知らない奴が、解ったように口を利く事がどうしても許せ無かった。

苦虫をつぶしたように顔をしかめながら、シンはデステイニーの背部左ウェポンラックに装備された大型ビームランチャー、M2000GX 高エネルギー長射程ビーム砲をジャスティスに向けて放った。

「クッ……………！！」

アスランはジャスティスを減速させる。すると、その緩急によってシンの移動予想地が大幅にずれ、結果的にアスランがこれを避け

た。しかし、シンは自身の予測が外れることを予期していたかのよう
にすぐさま右背部のウェポンラックに装備されているMMI-7
14 アロンダイト ビームソードを取りだした。

「守るさ……守って見せる……そして、終わらせる！」

デスティニーはアロンダイトを構え、突進する様な姿勢になった。
瞬間、アスランに悪寒が走った。咄嗟にビームシールドを展開す
る。

「そのためにはあんたを討つッ!!」

「クッ……!!?」

怒りと憎悪に塗れた声と共に、その圧倒的な加速でデスティニー
は一気に間合いを詰めた。

激しい光がシールドとアロンダイトの間で起こる。

反撃に出ようと、アスランはジャスティスの左右の膝／爪先間に
設置されたビームブレイド、MR-QI5Aグリフォン ビームブ
レイドで蹴りかかろうとするが、シンは紙一重でこれを察知し、距
離を取った。

アスランもまた、顔を歪めながら叫ぶ。

「お前は一体何を守っているつもりだ!?! 後ろに有るものをよく

見ろ!!」

シンの後ろに有るもの。それは禍々しく、巨大で慈悲の欠片も有してない大量破壊兵器、レクイエム。

そんな事、シンはとつくの昔に知っていた。これがどうするもので、これからどうなるのかを。それを知りながら戦っていた。

「あれは人でも、国でも無い！ 従わないモノ全てを焼き尽くす唯の兵器なんだぞ!!」

「黙れッ！ 裏切り者がッ!!」

怒声と共にシンの顔が怒りに歪んだ。もう我慢ならなかった。それを知った上で自分は戦っているのだ。自分達を裏切り、逃げた男にそんな事を言われたくなかった。

「戦争ばかりで……人の命を弄ぶ奴がいて！ もてあそ こんな世界はもう終わらせるべきなんだよッ!!」

デステイニーがまた、間合いを詰めた。そして左右の掌底部に内蔵された青白い光を放つ小型ビーム砲、MMI-X340 パルマフィオキーナ 掌部ビーム砲を喰らわせようとジャスティスに掴みかかる。

「ふざけるなッ!!」

しかしアスランは吠えると同時に、またもやビームシールドを展開し、デステイニーを寄せ付けない。

それぞれの機体の出力はだいたい同じようなものである為、拮抗した競り合いになる。

「そのためにオーブの国民は犠牲になれと!? お前が欲しかったのは本当にそんな『力』か!？」

「俺だって!!」

アスランの言葉をかき消すようにシンが叫んだ瞬間、デステイニーのパワーが少し緩まった。まるで何かを吐き出すように。

「俺だって……守りたかったさ……この『力』で全てを!」

涙を流す事を堪えるその声は余りにも痛々しかった。現に、シンの目には涙が浮かんでいた。

それを聞き、アスランは思わずシールドを止めてしまった。その瞬間、ジャステイスの右腕がデステイニーにより切り落とされる。

「だけど……出来るようになったのは……こんなことばかりだッ
!!」

「シン……俺は……」

「でも！ 議長とレイは俺の力が必要だって言ってくれた！ 俺の
力が役立って言うてくれたんだ!!」

デステイニーは背中の翼を広げ、ヴォワチュール・リュミエール
とミラージュコロイドを起動させた。光の粒子が辺りを舞い、一瞬
だけここが戦場だという事を忘れさせてくれる。しかしどれだけ綺
麗であろうと、兵器は兵器。大幅に上がった出力を利用し、デステ
イニーは再度突貫する。

「この『力』ですべてを終わらせて……その先に平和があるなら俺
は……!!」

デステイニーが右手を伸ばす。
アスランは覚悟を決め、足のグリフォン ビームブレイドでその
手を――――

「あきらめるなッ!!」

切り落とした。

「こんな風に『力』を使っている……お前は永遠に『力』の呪縛から逃れられなくなるんだぞ!!」

「クッ……それでも!!」

再度デステイニーが翼を広げた。残った左腕のパルマフィオキーナ発射口が青白く光る。

「俺は……俺はアアアアアアアアアア!!」

シンが吼えた。それと同時にデステイニーがジャスティスに最後の攻撃を仕掛ける。

圧倒的な速さ。類を見ない加速力。

しかし、シンは錯乱していた。例えデステイニーが最高の加速力を持っていたとしても、相手がエースなら馬鹿では無い。ただの突進ではいとも簡単にいなされてしまう。

そう、シンの最後の攻撃は、唯の突撃に他ならなかったのだ。

「この……馬鹿野郎!!」

アスランの頭の中で何かが弾けた。

デスティニーの腕をシールドで受け流し、グリフォン ビームブレイドでその最後の腕も切り落とす。

遂に、デスティニーが小爆発を起こした。

「うわああああああ！！！」

月面に落ちて行くデスティニーをアスランは静かに見つめ、一言

「シン……済まない」

そう呟くと、この戦いを終わらせるためにメサイアへとジャステイスを飛ばした。

この時、誰一人として気が付かなかった。デスティニーが光に包まれている事を――――

PHASE 1 運命と正義と（後書き）

三人称って難しいですね。

てか他のSSみてないから他の方とかぶってないか心配。

被ってたら教えてください。謝ります。（m'・ω・、） m ゴメ

ン…

PHASE 2 目覚めと出会いと（前書き）

難しい……未完のラノベを二次創作するのはこんなに難しいのか……。

PHASE 2 目覚めと出会いと

全身を襲う浮遊感。重力と言うものが感じられず、まるで空を飛んでいるかのような感覚により、シンは目を覚めました。星とオーロラが目に入り込んでくる。

「ここ……は……?」

確かに先程まで彼は月面で戦っていた。自分の全てをかけた戦いを。しかし、今シンの目に映る宇宙^{そら}は、争いの欠片も見えない。

「敵は……敵はどこだッ!」

シンが状況を掴めず、混乱したように声を荒げる。すると、辺り一面に散らばっていた星々が彼の前に集まり、人の形を成した。それはどこか見覚えのあるシルエットだった。

「シン……」

「ス……テラ……!？」

それはステラ・ルーシェだった。シンが守ると誓い、守れなかった女性。

ステラはシンの反応を見て、嬉しそうに微笑んだ。

「どうしたの？ ステラはこんな所に来ちゃ駄目だよ」

驚きもあったが、それよりも彼女に対する心配でシンの頭はいっぱいになる。まるで過去、妹を窘めた時のように優しい口調でステラを注意する。

「大丈夫……ちょっとだけ会いに来た……」

「ちょっとだけ？ ちょっとだけなのか？」

「うん……今はね」

「今は？」

シンは訳が分からないといった様子でステラに問いかける。

そんな彼の顔を見て、ステラはクスツと笑った。

「でも……またあした」

「明日？」

「うん！ またあした！ ステラね、やっと『きのう』を貰ったの！
だから……シンとはまたあした！」

ステラは嬉しそうに声を弾ませた。

そう、彼女には『きのう』が無かったのだ。生体CPUとして造られたステラは、その日の終わりに記憶を改竄、または消去されていた。『きのう』が無いという事は『あした』が無いという事。つまりそれは人間ではないという事だ。

しかし、ステラはどんな過程であれ、その呪縛から解放された。彼女にとってこれ程嬉しい事は無かった。

「私は変わった……だから……シンも変われるよ……」

「ステラ……？」

意味深な言葉を発すると、ステラは空高く上がって行く。その顔は、生体兵器なんかではなく、年相応の女の子の顔だった。

「シン……あした……ね。またあした！」

満面の笑みで言うと、ステラは光の中へ飛んで行ってしまった。
シンにはその笑顔が眩しかった。羨ましかった。だからシンは彼女を追いかけるように手を伸ばした。

シンの体も光に包まれる。目が眩み、浮遊感が一気に無くなる。
いつしかシンは気を失っていた——

——俺は……死んだのか……？　ここは……天国か……？

「クッ………！」

腕には草の感触。目に差しこむ太陽の光。

シン・アスカは草むらの中で目が覚めた。

「ここ……は？」

上半身を起こし、シンは狼狽する。彼の頭が、この事態を飲み込もうとしない。誰であれそうなるだろう。シンは覚えている。宇宙でアスランに敗れた事を。思い出すと、悔しさのあまり拳を握りしめる。

「ここは……プラントじゃない？ 地球……なのか？」

いつまでも座っては居られないのでシンは立ち上がる。プラントとは、宇宙に浮くコロニーである。空気も、緑も、人も全てが地球と変わらない。しかしコロニーであるが故に、空を見上げてしまえば嫌でも外壁が見え、そこがコロニーの中であると教えてくる。だがこの答えがさらにシンを困惑させた。

「俺は……月面で……」

シンは眩くと辺りを見渡す。まるでZ A F Tの軍事アカデミーの中庭のような手入れのされ方。そこにデステイニーは無い。

「……まだ夢でも見てんのかな……」

自分の格好を見ている。エリートパイロットを表す赤いパイロットスーツを着ている。あの時のままだった。しかしヘルメットは落してしまったのか、目に見える範囲にはない。

「……………あっ！」

咄嗟に思い出す。マユの携帯の事を。

マユ・アスカ。シンの実の妹であり、戦争に巻き込まれて死んでしまった家族。そんなマユの形見である携帯は、デステイニーの中に置いていたのだ。

シンは慌てて辺りを探す。必死に何分かした後、草むらにポツンと置かれたピンクの携帯電話を見つける事が出来た。

「良かった……ホントに良かった……」

安堵のあまり、腰を抜かしそうになる。開いてみてもディスプレイはちゃんと起動しており、壊れていない事を主張していた。それを確認して、パイロットスーツの内側に携帯を入れた。

「だけど……一体ここは……?」

シンは草むらから出た。整備された道と、学校の校舎に見えるも

のが周りをグルッと覆っていた。

——案外、ホントにアカデミーかも知れないな。

しかし、シンの考えにしては人がいなかった。まるでゴーストタウンのようになっていた。

「兎に角……どっかに人はいないかな……ん？」

そこらにある電灯に、黒い小さなカメラのようなものが見える。

いや、カメラは確かにシンを見ていた。

嫌な予感がし、シンが思わずその場から逃げようとした瞬間、警報が鳴り響いた。

「うえ！？」

恐らくこの敷地中に響いているであろう耳をつんざく様な警報。そしてシンに近づいてくるいくつかの影と足音。

「動くなッ！」

鋭い吊り目に、黒いスーツ、黒い髪。気の強そうな女性はシンを指さし、そう大声で言う。

「あ、あなたは一体何者ですか！？ どこから侵入したんですか！

「？」

それに続くように緑色の髪を持つ、身長の低い眼鏡を掛けた女性が迫力の無い声でシンに問う。

シンは黒髪の女性の高圧的な態度に少しばかり腹が立ったが、感情の大半は焦っていた。何者か？ これには答えられる。しかし、どこから侵入したか？ これには答えられない。答えを出せないシンだったが、黙っている訳にもいかず、相手を刺激しない様にゆっくりと口を開いた。

「お、俺はシン・アスカって言います。どっから来たかって言うのは……その………」

「言えない……とでも言う気か？」

黒髪の女性は、シンの言葉に容赦なく突っ込む。周りの人たちも口々に「ふざけているのか？」などそれぞれを口に出している。

シンは冷汗を流しながらも必死に弁明する。

「言えない訳じゃなくて……分かんないというか………」

「何？」

明らかに苛立っている黒髪の女性。
しかし苛立ちたいのはシンも同じだった。

「あゝもう！ 目が覚めたら此処に居たんだよ！！ 俺だって分かんないんだよ！！」

シンがついに爆発した。仕方ないだろう。シン自身も頭の中がこんがらがっているのだ。

「お、織斑先生……どうしましょう？ 私にはあの子が嘘を付いているようには見えません」

そんなシンの様子を見て、緑髪の女性が黒髪の女性に問う。

黒髪の女性も、この男は嘘を付いてはいないと何となくそう感じた。しかし――

「年上に向かってその口のきき方は何だ！」

「いで！」

その態度が気に入らなかったのか、シンは黒髪の女性に拳骨を喰らってしまう。シンはそのあまりの痛さに頭を擦りながらしゃがみ込む。

黒髪の女性はシンの年齢を知らなかったが、見た目と雰囲気、そして口振りから学生の年齢と判断した。それは、彼女が教員として何人もの学生を見て来たからできる判断だった。

「いって……」

「お、織斑先生！ いきなりそれはやり過ぎじゃあ……」

「そうだよ！ たくっなんでいきなり………いだ！！」

シンは緑髪の女性の言葉に乗り、反抗しようと口を開くが、また黒髪の女性に拳骨を貰う。予想以上に重い拳骨にシンはその場から動けなくなる。

「……お前がわざと侵入したのではない事は信じてやろう。しかし、ここにも規則と言うモノが有る。一応、職員室まで来てもらう」

着いて来いと言わんばかりに歩いて行く黒髪の女性。

シンは涙目ながらも、それを睨んでいると、緑髪の女性がシンに手を差し伸べて来た。

「大丈夫かな？ えっと……アスカ君？」

「あ、ああ……ありがとうございます」

シンはその手を取り、礼を言いつつ立ち上がる。彼とて、礼儀く
らいは解っている。

「それじゃあ行こっか。あ、私は山田^{やまだ}真耶^{まや}。よろしくね」

「あ、はい……どうも」

解っていても、所詮この程度だが。

「それで？」

ここは職員室。

黒髪の女性……名は織斑おりむら 千冬ちふゆ。彼女は椅子に腰かけながらシンに問う。

「目が覚めたら此処にいたと言うが……それは本当だな？」

「ええ。ホントに目が覚めたらあの草むらに寝てて……」

そう弁明するシンの姿は滑稽だった。明らかに周りから浮いている。彼の着ているパイロットスーツがそうしていた。

「……………夢遊病か？」

「ち、違います！」

「あの、ちょっと良いかな？」

突然、真耶がシンに向かって声をかけた。シンは首を動かし、真耶を見て首を傾げる。

「なんですか？」

「アスカ君のその服……何？」

シンは自分の服を見る。どこをどう見てもZ A F Tのパイロットスーツ。全世界の人間が知っているものだ。

「えっと……解りませんか？ 織斑さんも？」

困ったような顔になったシンは千冬に聞く。
しかし、千冬も首を傾げるだけだった。

「あ、あの！ Z A F Tって知ってますよね？」

シンの言葉に顔を見合わせる千冬と真耶。彼は啞然とした。

———どんだけこの国は平和なんだ！？

全世界を巻き込んだと思われた戦争は実はそうでは無かった。そう思うとシンは嬉しい様な悲しい様な気になった。

「えっと……ここって何て国ですか？」

「日本に決まっているだろう」

千冬は力強く答える。

しかし、シンはこんな言葉に聞き覚えは無かった。首を傾げてしまう。

「え、日本を知らないの！？ アスカ君はこの出身！？」

「オ、オーブですけど……………」

「オーブ？ どこだそこは？」

その言葉を聞いて、シンは思わず千冬の顔をマジマジと見つめてしまう。それもそのはず、C・Eでオーブを知らない人間など殆どいないからだ。

いや、実際、先程からおかしかった。Z A F Tを知らない？ そんな事が有る訳が無い。どれだけ平和であろうと、今の時代、コー

デインイターを知らないものなんて存在しないのだ。

「まさか……プラントを知らないなんて事は……」

「プラント？ 植物のことかな？」

真耶の言葉を聞いてシンは再度啞然とする。いや、そんなものはなかった。確実に、シンの中で時間が止まった。

プラントを知らない。そんな事が有るはずがない。

「ここは……一体……一体どこなんだ……！？」

「……までアスカ。お前、この世界の歴史を言ってみろ」

急に何かを思いついた様な顔になり、千冬はシンに言った。

何かを試すような、自分の考えを確実にするように企んでいるような顔を、シンは見たが特に気にすることなく語りだす。

「え……えつと……確か————」

語り終えた後、シンは自分の置かれている状況を信じられはしなかった————

PHASE 2 目覚めと出会いと（後書き）

誤字脱字、指摘お願いします。 > ((<

因みに、皆さんはデステイニーはフル・スキン全身装甲と通常のどっちがいいですか？ Gジェネみたいにテンションで変わるみたいのも良いですけど……できれば意見ください。

PHASE 3 異世界と試験と（前書き）

アンケートの結果、通常のISとなりました。
しかし、後でフルスキンも出すかも知れません。

（TDT）ゴメンヨー

PHASE 3 異世界と試験と

異世界。

昔、妹と見た名も無いドラマやアニメでよく見受けられた設定。当時中学校に通っていたシンも毎週心躍らせてテレビに食い付いたものだった。

しかし、それは飽くまで想像上の世界の話。それが現実となった時、人は冷静でなど居られはしないであろう。

つまり何が言いたいかと言うと――――

シン・アスカは混乱していた。恐らく今、目の前を死んだはずの妹のマユが通っても気付かない程に。それほどまでにシンの頭の中

はゴチャゴチャになっていた。

彼は千冬と真耶に大雑把な歴史を説明した。コーディネイターとナチュラルの事。そしてその種族間で起こった二度の戦争の事。M^{モビル}S^{スー}と言う人型機動兵器に乗って戦う事。

しかし、シンは全てを話した訳ではない。話さなかった事もある。軍の守秘義務に引っ掛かる事、そして自身の事である。自分がこの戦争で何を失い、何を奪ったか。それだけは簡単に人に言えることでは無かった。

「そんな事が……ホントにあるの？ そんな……ここと違う世界なんて……」

真耶は信じられないといった様子でシンに問う。

まあ、信じられる方が少数であろう。シンとてそれは理解していた。先程、千冬にこの世界の歴史を説明された時、シンも信じられなかったのだから。

「はい……信じてもらえないかも知れませんがホントなんです」

「……成る程な。山田先生、アスカが嘘を付いているように見えますか？」

「信じられませんが……少なくともアスカ君はホントの事を言うるように見えます」

何かを考えるような素振りをしながら千冬は真耶に問いかけた。普通ならばシンが嘘を付いていると思うであろう。だが、真耶もシンの眼を見て、「この子は嘘を付いていない」と確信していたのだ。これは真耶が教職員として立派な人格を築いている証拠でもある。そんな彼女の反応を見て、千冬はどこか嬉しそうに頷くと、またシンに顔を向けた。

「……と、言う訳でだ。私も山田先生もお前の言う事を信じよう」

「あ、ありがとうございます！」

「しかし、だ」

千冬の言葉を受けて、信じてもらえた事に喜びの声をシンが上げると、千冬はその言葉を遮る様に口を開いた。その目は至って真剣で、シンを竦ませるには十分だった。

「だからと言って問題が解決するわけでは………ん？」

突然、千冬が言葉を止めた。その視線はシンを——正確にはシンの首筋——捉えている。真耶も何事か？　と言わんばかりにシンに目を向ける。

シンは何が何だか分からず、目を泳がせていた。

「アスカ……お前、それはなんだ」

千冬の言葉を受け、シンは自身の首元に手を伸ばす。

シンはその手の中に有るものを見て、目を見開いた。そこに有ったのは、貝殻のネックレス。死んだはずのステラが身に着けていたものだった。

「なんで……これが……!？」

シンは信じられなかった。自分の言う歴史と千冬の言う歴史の違いにも驚きはしたが、今回はその驚きを遥かに凌駕した。

それもそのはず、ステラが死んだ時、シンは彼女を湖の底へ沈めた。誰にも彼女を弄られたくない。もう彼女を静かな所へ行かせてやりたい。そんな思いからの行動だった。その時に、ステラがしていたのがこのネックレスだった。彼女と共に沈んだはずのネックレス。それをシンは何故か首に着けている。驚くな、と言う方が無理な相談だった。

「ア、アスカ君？」

「……あ、えっと……何ですか？」

「そ、それって……」

「アスカ、それを貸してくれないか？」

未だに頭がよく回らないシンに、千冬はそう聞いた。

シンはその言葉に困ってしまう。彼も千冬が善人なのは感じ取っていた。それでもこのペンダントは気安く誰かに渡していいものは無いのだ。

「安心しろ。別に奪おうと言う訳じゃあない。少し見せて欲しいだけだ」

そんなシンの想いを察したのか、千冬は笑顔を見せながら言った。シンは内心、「そんな顔はするいだろ」と思いながらも、仕方なく首からネックレスを外した。

「ありがとう……山田先生。これを」

「織斑先生……やっぱりそれって……」

「はい。ISですね」

何も分からないシンの事を置いて、二人で話を進める千冬と真耶。
IS。先程の千冬による歴史の説明で、シンはおおよそながらも
その存在を知っていた。

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想
定し、開発されたマルチフォーム・スーツである。

「……アスカ、このネックレスを調べさせてくれないか？」

「……え」

千冬のその言葉に、シンは隠す事も無く顔をしかめた。

「……何をするんですか」

「そんな顔をするな。これがどんなISか調べただけだ。壊した
りしない」

正直御免だった。彼にとってこのネックレスは、何よりも大切な
物なのだ。それを他人に渡し、挙句調べられるなど言語道断だった。
しかし、今シンを助けてくれる人が、千冬と真耶しか居ないのも
彼は承知していた。

「ダ、ダメかな……？」

「……本当に、それだけなんですね？」

真耶の恐々とした声に、シンは低いトーンで聞き返す。

「も、もちろん！ 約束は守るよ！」

「……ハア……なら良いですよ。あんまり手荒に扱わないで下さいね」

真耶の一生懸命信じて貰おうとするその姿に、シンはどうとう観念した。

千冬は満足そうに頷き立ち上がる。

「では、アスカ。少し待っている。直ぐ終わる」

千冬のその力強い声に、シンは首を縦に振るしかなかった。

シンを応接室で待たせている間、千冬と真耶は二人でネックレスの解析をしていた。

いや、今の言い方では語弊が生じてしまう。解析『しようと』していた。の方が正しい。

「ほぼ全てが解析不能……か」

千冬がモニターを見ながら小さな声で呟く。

それに真耶も同調するように頷きながら声を上げた。

「コアの部分だけでなく……その他全てですものね……」

「解ったのは、このコアが登録されていない事と、ネックレスは貝殻では無くそれを模しているだけである……と言ったところか」

「それと、アスカ君で無いと動かせない……実質、専用機ですね」

真耶も色々試しては見たが、結局のところ解ったのはその程度の事だった。

パワーも、能力も全てが未知数なこのIS。どうするべきか迷う。しかし、同時にこれは貴重でもあった。女にしか扱えないIS。そんなISの専用機を何故か男ながらも動かせるシン・アスカが。例外として千冬の弟、織斑おりむら一夏いちかが居るが。

「上層部に指示を仰ぐか……」

千冬はそう言うと言電話を取りだした————

「直ぐ終わる……あの織斑って人、直ぐ終わるって言ったよな」

シンは応接室のソファに座りつつ一人呟く。もうここで彼が待ち始めて三時間は経とうとしていた。忘れてはいけないのが、シンは先程まで戦争をしていたという事だ。体は汗ばみ、疲労から来る眠気でシンは限界だった。

「……外の空気を吸おう……」

シンは立ち上がり、窓を開けた。心地の良い風と空気が部屋を満たし、幾分か彼の疲労を和らげる。

「綺麗だな……本当に……綺麗だ」

学園の整備された庭や通路を見下ろして、シンは心の底から感動した。そこには戦時中独特のどこか緊張する空気が無い。目を瞑れば、そこを楽しそうに歩く学生が思い浮かんだ。

「（IS学園……確か高校だったけか……俺も戦争が無かったら普通に通ってたのかな……）」

パイロットスーツの内側のポケットから携帯を取り出す。開くと、家族全員で撮った集合写真がシンを迎えてくれる。妹の笑顔。母親の笑顔。父親の笑顔。もう二度と見れないそれらが。

「（マユもいつかは高校に上がって……反抗期とかあって……喧嘩して……）」

シンの頬を涙が伝う。しかし、彼はそれに気が付かない。

「ア、アスカ君！？ な、泣いてるの！？」

声が聞こえた方を彼が見ると、真耶と千冬が応接室の扉を開けていた。

真耶の言葉で、シンはやっと自分が泣いていた事に気が付いた。もう強くなったと思っていたのに。いつまでも変わらない。そんな自分が女々しくて情けなくなる。

「アスカ、具合でも悪いのか？」

「な、何でも無いです！」

「ほ、本当？」

シンは目を擦りながら精一杯の笑顔を二人に向ける。
真耶と千冬は気を使う様な素振りをしたが、シンの態度を見て踏み行っていない事だと考え、それ以上詮索しなかった。

「……なら良い。それと、このネックレスを返す」

「あ、はい」

「それで……ネックレスとこれからの事なんだけど……」

返して貰ったネックレスを首に掛け、シンは真耶に顔を向ける。
真耶は頭の中で色々整理しながらも言葉を紡ぎだす。

「えっと、そのネックレスなんだけど……ISって解るよね？」

「ええ。さっき説明して貰いましたし」

「ISには待機状態って言うのがあるの。それはガントレットだったり指輪だったりそれぞれ何だけど……」

真耶自身も混乱しているのか、中々言葉を出せない。そんな真耶を見かねてか、千冬が前に出た。

「つまり、そのネックレスはお前のISだという事だ」

「はい？」

「そのネックレスはね、本物の貝殻じゃなくてそれを模したISなの」

千冬と真耶の言葉にシンは首を傾げる。
そんなシンを見て、千冬が口を開く。

「論より証拠と言う言葉もあります。なによりも見せた方が早いでしょう。山田先生」

「そうですね。アスカ君、ちょっと一緒に来てもらって良いかな？」

「はぁ……………?」

とんとん拍子で進む話に、若干置いてけぼりになりながらも、シンは二人に着いて部屋を出た。

「準備は良いか？」

まるでカタパルトデッキのような所。いや、実際そうなのだろう。そこで千冬はシンのISを起動させようとしていた。

シンは不満そうな顔をしながらも千冬の言葉に首を縦に振る。

「えっと……準備は別に良いんですけど……どうやって起動するんですか？」

「念じろ」

シンの問いにバツサリと答える千冬。あまりのアドバイスの短さにシンは茫然とする。しかし、千冬の顔には「やって見せろ」とでかでかと書いてあった。

仕方なく、シンはネックレスを手取る。

「（念じろったって……えーっと……動けー動けー動けー！！）」

瞬間、シンの頭の中に膨大な量の情報が流れ込んできた。操作方
法。兵装。戦闘記録。その他多数。一瞬にして彼の頭の中はいっぱ
いになる。それによって理解する。このISはデステイニーである、
と。

そして今度はシンの体が光に包まれた。彼の体を何かに包まれる
ような感覚が襲う。

光が晴れると、シンの四肢には鉄の塊が装着されていた。頭にはV
字ブレードアンテナに装甲。腕には青い鎧。脚には白い鎧。青い肩
の装甲にはフラッシュエッジ。そして背中には深紅の翼が。まさに
その武装はデステイニーの物だった。

「なんだ……これ。どっから……こんなんが」

「それがISだ。アスカ、カタパルトまで歩けるな？」

千冬の言葉にシンは驚きながらも頷き、カタパルトまで歩く。最初の数歩は勝手がわからず、よろよろとした歩き方だったが、その後は慣れたのか実にスムーズに歩いた。シンはカタパルトに辿りつき、脚の固定を済ませる。それが一体どれ程難しい事なのかも知らずに。

顔に出しはしなかったが、千冬は内心驚いていた。

何となく予想が付いていたとは言え、まさか数歩で歩く動作をマスターするとは思っていなかったのである。

「げ……何か固定されたんだけど……」

「ああ。これからお前にテストを受けて貰う。このテストに受ければこちらでの生活のサポートは我々学園側がしてやれる。勿論、無償でな」

「はあ？」

シンに取ってこの事は初耳であったが、右も左も分からないこの場所での話はとても魅力的だった。

彼は不満を呟きながらもこの提案を飲んだ。まあ、飲まない訳にはいかなかったのだが。

因みに、テストと言うのは試験官と戦うことだ。勝敗は関係なく

どれほどISを使えるか、である。勝つに越したことは無いが。

しかし、このテストはもう無意味である。ISでここまで綺麗に歩けただけでも、もう合格点なのだ。さらに専用機持ちの男。誰が落すであろうか？結論を言おうと、形式上このテストは受けなければならぬ。ただそれだけのことである。

「飛び方は解るな？」

「何となくですけど……」

「なら問題は無い。発進しろ！」

千冬の言葉を聞き、シンは深呼吸をする。大丈夫。俺ならできると気合を入れる。そして大きく息を吸い込んで――――

「シン・アスカ！ デステイニー！ 行きますッ！」

カタパルトがシンを大空へと飛び立たせた。

シンの目に入る青空と眩しい日差し。MSと違い、体の一部が露出しているため感じる事の出来る気持ちの良い空気。

「アスカ君」

「ん？」

シンの後ろから声がかかり振り返ると、ネイビーカラーをした4枚の翼を持つI Sを装着した真耶が空を飛んでいた。シンが先程から真耶がいないと感じていたのは、こういう事だったのだ。驚いているシンの事を置いて、真耶は笑顔で語りかける。

「私がアスカ君の試験官を務めます。よろしくね」

「え……ああ、はい」

「で、一応ルールとして、シールドエネルギーが切れたらそこで終了だから気をつけてね？」

「シールドエネルギー……これか。はい解りました」

シンがそう答えると、真耶は手に持つライフルのような物を構えた。戦闘準備万端。と言う意思の表れである。

「では、行きますよ！」

真耶が大声で言った瞬間、シンの目の前にモニターが現れた。そのモニターには大きく、『警告』と書かれている。シンはその言葉を確認した瞬間、横に飛び退く。その後をライフルの弾が高速で通過した。

「いきなりかよ！」

そんなシンの言葉を聞き流し、真耶はライフルを撃ち続ける。

シンは乱数回避を開始。上下左右とにかく動きまわり、被弾しない事に努める。

「チッ……武器は……」

シンが乱数回避をし、顔をしかめながらも呟くと、またもや目の前にモニターが現れた。そのモニターには『展開可能装備一覧』と書かれており、その項目には『RQM60F フラッシュエッジ2 ビームブーメラン』と『CIWS』の二種類しか載っていないかった。

「って、これだけか!？」

シンは思わず叫んでしまう。

それもそのはず、デステイニーはコンセプトとして、換装無しでの全距離対応戦闘が可能な設定になっていたのだ。その為、近距離

用の大剣『アロンダイト』や遠距離用の大型ビームランチャー『高エネルギー長射程ビーム砲』等を積んでいたのだ。それがこれだけしか使用可能な兵装が無い。ショックを受けるのも当然と言えば当然なのかも知れない。

「そこッ！」

「な、くそ！」

そんなシンの隙を逃さず、真耶はライフルを連射する。数発が綺麗なまでに直撃し、シールドエネルギーを大幅に削る。

シンは苦虫を潰した様な顔になった。

「この！ やってやるよ！」

半ばヤケクソ気味に叫び、シンはフラッシュエッジを手にとった。

『ビームブーメラン>>ビームサーベル』

シンが起こそうとした行動は、フラッシュエッジの出力を最大に設定し、ビームブーメランから小型のビームサーベルへ変化させるというデスティニー特有の仕掛けだ。

本来……MSなら少しだけ手間取る。しかし、それが唯思っただけでそうなる。シンは心の中で少し感動しながらも、真耶へと攻撃を開始した。

「ハアアアアアア！」

今出せる最大のスピードで真耶へ接近し、振り上げたそれを振り下ろす。

真耶は紙一重でこれを避け、近接戦では分が悪いと一瞬で判断。即座に距離を取ろうとする。が、

「逃がすかよ！」

「速い!？」

シンも軍人である。戦況理解はできる。遠距離戦は分が悪いと踏んで、一気に詰めより、フラッシュエッジを横に薙ぐ。

「きゃああああ!？」

直撃を受けた真耶は、シールドバリアーに守られたとはいえ、大きく吹き飛ばされる。エネルギー残量も大きく削られた。

真耶はなんとか姿勢制御をし、シンに再度向き直る。

「もう終わりですか？」

そんなシンの言葉に、真耶は少しムツとした顔になった。
確かにシンは強い。しかし、真耶とて教員なのだ。少しだがプラ
イドがある。

「それなら……これで！」

真耶の腕に新たな武器が出現した。

小型のバズーカランチャーの様にも見えるそれをシンへと向け、
放つ。先程までのライフルと違い、弾速が遅く、弾も大きい。

シンはそれを撃ち落とそうと両側頭部のC I W Sを撃ち、弾幕を
張る。しかし――――

「……！
バーストブレッド
炸裂弾！？　しまっ………！！！」

油断。未だ戦闘に集中していないシンは軍人としてやってはいけ
ない、油断をしてしまったのだ。

シンの言葉通り、その弾は炸裂弾^{バーストブレッド}だった。だが、気付いた所で時
すでに遅し。間近で撃ち落としてしまったそれは、シンを巻き込ん
で爆発した。

「油断しましたね……？」

爆風の中に居るであろうシンに、優しく問う真耶。今まで何度か削っていたのだ。通常なら、これでけりが付く。

「山田先生。気を抜かない方がいいでしょう」

突然、千冬が真耶に通信を入れて来た。

その言葉に真耶は首を傾げる。先程も言ったが、普通なら終わっているのだ。真耶の頭の中には『テスト終了』と言う文字が浮かんでいるのだ。

「アスカのISは……」

例えば、目の前にPCが有るとしよう。そのパソコンが、どれほど優秀に動けるスペックだとしても、どれほど大容量のHDを持っていたとしても、OSや中身が伴わないと真価など発揮できない。回りくどくなるが、もしそれがシンの持つISだとしたら？ ただ今までは真価を発揮できていないだけだとしたら？

「まだ、初期設定のままですよ」

その言葉に真耶が驚愕に顔を染めたと同時に、爆風が晴れる。

真耶の目に映るそれは特別見栄えが変わっているわけでもない。強いて挙げるなら、左腕に盾の様なものが付いている事と背中に大きな『何か』――アロンドイトと高エネルギー長距離ビーム砲だ

――が二つ付いている事位か。
しかし解ってしまう。数秒前までのシンとはそれだけでは無く何かが違う事が。

『フォーマット フィッティング 終了』

シンのモニターにそう浮かび上がった。

「何だ……これ……？」

「まさか……本当に今まで初期設定で……！？」

真耶が驚くのも無理は無い。

確かに、初期設定のままでも『ある程度』なら戦闘は可能だ。しかし、飽くまで『ある程度』と言う枠組みの中だけである。今までのシンの攻撃力、機動力は、『ある程度』と言う枠組みを優に超えていた。

「力が……デステイニーが……変わった……！」

俗に言う第一形態移行。
ファースト・シフト

シンが何かを確信したかのように力強く呟くと、もう見なれたモニターが出現した。

そこに書かれていたのは『展開可能装備一覧』と言う文字。先程までは『RQM60F フラッシュエッジ2 ビームブーメラン』

と『C I W S』しか載っていなかった項目。

だが今は違う。今の『展開可能装備一覧』は『M2000GX
高エネルギー長射程ビーム砲』、『M A—B A R 73/S 高エネ
ルギービームライフル』、『M X 2351 ソリドウス・フルゴー
ル ビームシールド』、『M M I—X 340 パルマフィオキーナ
掌部ビーム砲』そして『M M I—714 アロンダイト ビーム
ソード』が載っていた。

「アロンダイト……これなら一撃で！」

シンはそう言うと言と背中^に手を伸ばしアロンダイトを手^に取った。
自身の倍近くあるその大剣を、腰を落とし構える。

「行くぞッ！」

フルスピード。第一形態移行前とは比べ物にならない速度で真耶
へと突っ込み、その巨大な剣を真耶の上から振り下ろした。

彼女は声を上げる暇もなく地面に叩き付けられる。それを見て千
冬は声高らかに宣言した。

『テスト終了！ 勝者、シン・アスカ！』

ここにI S学園所属、シン・アスカが誕生した。

PHASE 3 異世界と試験と（後書き）

シンがネックレスを貸したのが軽率だったかなー？とか。
設定間違っていないかなー？とか。

話し方変じゃないかなー？とか。

戦闘変じゃないかなー？とか。

支離滅裂になって無いかなー？とか。

両方の原作を知っていても、色々考えます。

そう言う所は指摘をお願いします。次に生かすので。
誤字脱字も待っています。

PHASE 4 学園と入学と（前書き）

今回は切れが悪い終わり方をしています。
何故かって？ アイディアが出なかったからですよ！

PHASE 4 学園と入学と

正しい世界………人は未だにそれを出せないでいる。
答え

入学テストから一夜明けて、シンはIS学園の一年一組に居た。
理由——実はシンがテストを受けた次の日がこの学園の入学式だったのだ。だからシンが目覚めた時、学園内には学生がいなかったのだ。

昨日のテストの後、シンは疲労で体力が限界だったが、教科書や制服の発注など学生には欠かせない事が多すぎ休めなかった。

テスト終了後、シンと千冬はすぐさま制服を扱っている店へ出向き、採寸を測った。その際、偶々制服のストックがあったおかげで直ぐに入手する事が出来た。そのストックと言うのが、織斑一夏のも物であった。実は店側が初めての男子入学生と言う事で浮足立ち、

まだ注文を受けていない状態で、様々な大きさの制服を作ってしまった物のあまりだった。さらに教科書を発注する時間が無かったので、その足で業者まで出向きその場で刷ってもらい、事無きを得た。そしてシンの戸籍だが、なんと国が面倒な手順を全て省いてくれ、一日も待たずに作られた。それほど国に取ってシンは特別という事だ。

そんなドタバタとした一日を送り、ストレスが限界に達しそうなシンだったが、今はその時よりも心労が溜まっていた。

「……ハア……」

全身に突き刺さる視線。

シンは座席に座りつつ俯き、小さな声で苦しそうにため息を吐く。学生にとって高校入学と言うものは、大体の人がこれから始まる学校生活に心躍らせるものだ。しかし、シンは失念していた。『I Sは女性にしか使えない』と言う事を――――

「こんな事あるのか……」

つまり、クラスメイトが女子ばかりなのだ。一応シンは千冬に弟がいて、その弟が初めてI Sを動かす事の出来た男だと言うのは聞いていた。その男……織斑一夏がI S学園に入学し、一緒のクラスになる事も。理由としては、千冬がシンの事を監視下に置きたかったからだろう。

シンは自分の座席の周りを目線だけで見渡す。女。女。女。女。女。女。……男。シンに取ってみては息をするのも辛い環境だ。

「みなさん入学おめでとう！ 私は副担任の山田真耶です！」

そんな空気を壊しにかかったのが、シンの試験官を務めた真耶だった。満面の笑み。第一印象が重要と言う事で、真耶も結構張り切ってたのだ。

だが、そんな真耶の気持ちに反して、教室の中は誰一人として声を上げない。それどころかシンを除き、誰も真耶を見ていなかった。

「あ、ええ……！？」

真耶が驚きと落胆が良い具合にブレンドした声を上げる。

シンは心の中で真耶へ憐みの言葉を掛けた。彼は見ていたのだ。

真耶の頑張ろうという気持ちの入った満面の笑みを。

「えっと……今日から皆さんはこのI S学園の生徒です」

真耶は気持ちを切り替え、モニターを使い、お決まりの学園紹介を始める。そんな真耶の気持ちがやっと伝わったのか、バラバラとだが生徒が彼女の話に注目しだす。

「この学園は全寮制。学校でも、放課後も一緒です」

初めて寮生活をする人にとってみては、これもまた心躍る事なのかもしれない。しかし、シンはアカデミーで既に寮生活を送っていたため、特別心を動かされる事でもなかった。

「仲良く助けあって、楽しい三年間にしましょうね」

真耶は生徒全員に問うように言う。けれど、結局彼女の話聞いていたのはシンを含む数人だけだったため、返事は返ってこなかった。

そんな空気にととう耐えられなくなったのか、真耶は冷や汗を流しながら口を開いた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします！ えっと……出席番号順で」

だが、そんな空気に耐えられなかったのは、真耶とシンだけでは無かった。

織斑一夏。彼も耐えられなかった人間の一人だ。

「（箒！）」

一夏は青ざめた顔で幼馴染みの 篠ノ之 箒に、助けてくれと視線を送る。そんな視線を受け、箒は「こちらを見るな！」と言わん

ばかりに顔を背けた。一夏は、そんな態度を取られるとは夢にも思っていなかったので、驚きとショックで眉をヒクつかせた。

「（それが六年ぶりに再会した幼馴染みに対して取る態度かあ……？俺、嫌われてるんじゃない……）」

「……斑君？ 織斑一夏君？」

「……！ は、はい！」

そんな考えごとをしていたからか、一夏は自分の番が回って来た事に気が付かず、真耶に気の抜けた声で返してしまった。
周りからはクスクスと笑い声が起こる。

「あのー大声出しちゃってごめんなさい。でも、『あ』から始まって今、『お』なんだよね。自己紹介してくれるかな？ 駄目かな？」

「あ、いや、そんなに……謝らなくても」

先生とは思えない態度と声に、一夏は少し困惑気味に答えつつ、自己紹介をするために立ち上がる。

瞬間、先程から全身に感じていた視線が更に強くなる。一夏もまた、冷や汗を流しながらゆっくりと声を上げた。

「え〜……えっと、織斑　一夏です。よろしくお願いします」

期待の眼差し。それが一夏を襲った。辺りを見回すと、ギラギラと輝いた目で皆が彼を見ていた。

再度箒に助けを求めようと視線を送るが、先程同様顔を背けられる。

「（いかん……ここで黙ったままだと、暗い奴のレッテルを張られてしまう!）」

意を決したかのように一夏は息を吸い、口を開く。

「以上です!」

思いつきり期待はずれなその言葉に、シンを除く全員が椅子から滑り落ちるような素振りを見せる。

「あれ!?　駄目でした!?　……うっ!」

驚いた様に言う一夏の頭を、何者かが殴った。そのあまりの痛さに、一夏はその場に蹲ってしまいが、誰が殴ったのか確認するため

に顔だけを上げる。

そこに居たのは一夏の姉、織斑 千冬だった。

「げ……千冬姉!？」

そう言った一夏の頭に、千冬は再度拳骨を落とす。そして眉間に皺を寄せつつ、言い聞かせる様に口を開く。

「学校では織斑先生だ」

またもや一夏は頭を抱え蹲った。

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけて済まなかったな」

痛がる一夏を置いて、真耶は千冬に問う。

千冬は真耶に笑顔を見せ、質問に答えつつ教卓へ向かい、クラス全体を見渡した。若干の緊張がクラスに走る。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ」

凜々しい態度と良く通る声。整った顔から放たれるそれは人の心の奥底まで届いているのだろう。

『キャーーーーー!!』

突然起こった黄色い叫び声。クラス中から「お姉さまー!」や「素敵ー!」などの、女性特有の甲高い声が響き渡る。

それらは全て、千冬に向けられていた。これには、シンも一夏も目を点にしてしまう。

「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

クラスの様子を見て、溜め息交じりに言う千冬。その顔には「鬱陶しい」と書いてあるように見える。

だが、このような状態の女生徒にそんなことを言うのは、結局火に油を注いでいるだけだった。千冬の『言いたい事は言う』性格上仕方ないのかもしれないが。

「キャーーーーー! お姉様! もっと叱って! 罵って!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけあがらないように躑をしてゝ！」

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

そんな黄色い声援を無視し、呆れと怒りが七対三程の割合で混ざったような顔をして千冬は一夏に問う。

「いや……千冬姉……俺は……うつ！？」

威厳たっぷりの言葉にたじろぎながらも一夏は答えたが、その瞬間に彼は千冬の腕力によって机とキスをさせられていた。手加減しているとはいえ、千冬の力は相当強く、一夏は顔を歪ませた。

「織斑“先生”と呼べ」

「はい……織斑“先生”……」

そんな二人のやり取りを見て、シンを除いたクラスメイト達がざわざわと小さな声で話し始める。

その内容は至って単純。二人の関係についてだ。口々に「親戚？」や「まさか姉弟！？」果てには「代わって欲しいなあ！」等と自身

の考えを話していた。織斑と言うありふれた訳ではない名字から解りそうなものだが。

「静かにッ！」

一喝。千冬が言葉を発した途端、話声がピタリと止んだ。彼女は教室を一瞥し、一呼吸置くと口を開いた。

「諸君らにはこれからI Sの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。良いか、良いなら返事をしろよ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

教官かよ。とシンは思った。案外外れてはいないのだが。

普通なら恐らく……いや、間違いなく不満が漏れるであろう言葉。しかし、この学園は普通ではないのだ。

『はい！』

綺麗に揃った返事を千冬は満足そうに聞き、再度口を開く。

「あと気付いているとは思うが、このクラスには織斑を除いてもう一人男子がいる。昨日急遽入学が決定した男子だ。名前は自己紹介

を待て。特別情報規制は敷かないが、あまり外部の者に他言するなよ。では、続ける」

その後も順当に自己紹介が終わっていき、遂にシンの番が回って来た。

シンはゆっくりと座席から立ち上がり、教室を見渡した。先程一夏に向けられたそれよりも強い眼差し。それもそのはず、彼女たちにとってISを動かせる男は織斑 一夏、唯一人だったのだ。事前に一夏と言う男がいるのは、ニュースにもなるくらい大きな出来事だったので皆知っていた。しかし、いざ入学してみたらどうだ。もう一人男がいるではないか。興味を持たない方がおかしい。

「えー……シン・アスカです」

そんな眼差しを受けていても、シンの声のトーンは低かった。

理由——原因はシンの心境にあった。現実を受け入れるのなら、シンに取ってここは異世界となるのである。シンはいずれ自分の世界に帰る気にいる。そうなった場合、ここで出来た繋がりや絆は全て捨てなくてはならない。

彼は怖くて怖くて堪らないのだ。家族やステラを失った時の様にその繋がりや絆を失くす事が。だから迷っている。ここで繋がりを作る事に対して。

しかしここで終わってしまえば、先程の一夏の様に千冬に叱責を受けるやもしれない。趣味くらいは言おうとシンは口を開く。

「趣味は………」

ここまで言って気が付いた。自分に趣味と言える趣味が無い事を。思春期と言う多感な時期を、戦争と言う殺伐とした環境で消費していたため、シンの関心はそちらには回ってなかったのだ。

どうするべきか迷った挙句、趣味と言うより得意な物を挙げることにした。

「趣味はプログラミングとか……あと運動もある程度出来ます。よろしく願います」

シンの言葉を受けクラスメイトは一夏の時のようにずっとこけず、口々に「プログラミングできるんだって……凄いね」や「真っ赤な瞳……どこの国の人？」などそれぞれ感想を漏らしていた。……運動に関してはある程度ではないのだが。

その後、ショートホームルームSHRもなんとか無事終わり、休み時間。

シンは一人で窓から外を眺めていた。この世界に来て、彼はこの日本と言う国の緊張感のない空気が好きになった。いつかのオーブのように誰もが笑い合っている場所が。因みに、今も廊下から痛いほど視線を感じてはいるが。

「よう」

シンに後ろから声がかかった。彼が振り向くと、そこに居たのは一夏だった。その声はどこか嬉しそうである。

実は、一夏も今日入学するまで、男子は自分一人だと思っていた

のだ。そんな時に現れたもう一人の男子。嬉しくない訳が無かった。

「あんたは……織斑 一夏だっけか」

「覚えててくれたのか！」

「ああ……まあ」

弾むような声で一夏は続ける。

「俺の事は一夏って呼んでくれ！ その代り、シンって呼んでいいか？」

先程の真耶にも負けるとも劣らない満面の笑み。一夏の顔が、シンに会えて嬉しいと語りかけていた。

そんな笑顔を見てシンは思い出す。自分の、軍事アカデミーでは無く、普通の学生だった頃の友人たちを。

今思い返すと、あの時のシンは幸せだった。当時は、テストがあって、喧嘩があって、怒られて。面倒くさい毎日だと思っていた。しかし、全てを失ってから気が付いた。そんな平凡な毎日が堪らなく楽しかったという事を。

「……………お、おい？ ダメか？」

何を迷っていたんだ、俺は。とシンは思った。無くならない繋がりや絆なんて無いのだ。それを無くす事を恐れていたら人は前になんて進めない。そして元より過去にも戻れない。だからシンは――

「……………いや、これからよろしく頼む。一夏」

笑顔。久しく見せていなかった心からの笑顔をシンは一夏へ見せた。

一夏はそれを見て、また嬉しそうに笑うと、大きく言った。

「おう！」

この時、彼の数少ない友人がまた一人増え、シン自身もほんの少し吹っ切れたのだった。

「ちょっとよろしくて？」

「あ？」

「へ？」

授業も順調に進み、数回目の休み時間。

談笑をしていたシンと一夏の元に、金髪の女性が歩み寄って来た。いきなりかけられた声に、シンと一夏は気の抜けた返事を返してしまふ。

そんな二人の返答が気に食わなかったのか、金髪の女性は顔をしかめた。

「まあ、何ですのそのお返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄ですのに！ それ相応の態度と言うものがあるのではないかしら？」

まるで中世の貴族のような喋り方。シンは思った。何言ってるんだこいつ……と。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

一夏が素直にそう言うのと、金髪の女性は信じられないといった表情を浮かべ、彼に迫った。

「私を知らない！？ セシリア・オルコットを！？ イギリス代表候補生にして入試主席のこの私を！？」

「ちょっといいか」

金髪の女性――セシリア・オルコット――の言葉に、手で制止をしながらシンは口を開いた。セシリアは質問されるのが嬉しいのか、笑みを浮かべながらそれを承諾する。

それを見てシンは声を上げる。

「代表候補生って……何だ？」

クラスメイト全員がずっこけた。勿論、一夏を除いて。シンが知らないのは当たり前だが、一夏が知らないのは間違っていると思うが。

訳が分からないと言った様子でうろたえるシンと一夏を見て、セシリアは怒りの声を上げた。

「信じられませんわ！ 男性と言うのはこれ程知識が乏しい物なのかしら？ 常識ですわよ、常識」

馬鹿にしたような言い方。いや、実際馬鹿にしている。シンは少しムツとなり言い返そうとしたが、その前に一夏が声を上げた。

「で？ 代表候補生って？」

「国家IS操縦者の、その候補生として選出されるエリート的事ですわ！ 単語から想像したら解るでしょう？」

「そう言われればそうだな……」

偉そうに言うセシリアに素直に感心する一夏。シンがイライラしただけなのに対して見れば、その素直さは素晴らしいものだった。

「そう！ エリートなのですわ！」

そんな一夏の反応を受け、嬉しそうに……と言うより威張る様に胸を張り、声も張るセシリア。

シンはこの手の人間が大っ嫌いだ。自然と眉間に皺が寄ってしまった。

「本来ならばわたくしのような人間とクラスを同じにすることだけでも奇跡！ 幸運なのよ！」

「はいはい……俺はラッキーだよ。あんたみたいなお偉いさんと同じクラスになれてな」

「やめろってシン！」

棘のある言葉をシンが放った。一応、一夏が止めに入っただものの、セシリアはシンにしかめた顔を向け、低いトーンで言った。

「……馬鹿にしていますの？」

「そんなのあんたが一番良く解ってんじゃないのか？」

「な、なんですって………！」

「ど、ところで！ お前って入試主席なんだろう！ 凄いな！」

険悪なムードを一夏が壊しにかかった。

普通の人間なら、そんな事を言われても話を変えようとは思わないだろう。だが知ってか知らずか、セシリアは褒められれば増長するタイプだったので、直ぐに一夏の言葉に食い付いた。

「その通り！ 何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

傲慢するように俗に言うドヤ顔で話すセシリア。

ここで終わっていたらいろいろ面倒な事を省けただろう。しかし未来予知ができる訳でもないシンと一夏は、セシリアに今一番言っ
てはいけない事を言ってしまった。

「ん？ 教官なら俺も倒したぞ？」

「……俺もなんとか倒せたけど」

「……………は？」

驚愕。セシリアの目が点になる。

「わ、わたくしだけ、と聞きましたが……………？」

「女子では……ってオチじゃないのか？」

一夏がそう言った瞬間、セシリアがシンと一夏に凄まじい形相で

詰め寄った。それはもう女性がする様な顔ではなかった。

「あ、あなたたち！　あなたたちも教官を倒したって言うの！？」

「お、おい……落ちつけて……」

彼女の気迫に流石のシンもたじたじになってしまふ。彼の横の一夏も同様だ。

「こ、これが落ちついていられ………！！！」

その瞬間、セシリアの声をかき消すように授業開始のチャイムが鳴り響いた。

彼女は悔しそうに顔を歪め、シンと一夏を指さす。

「は、話の続きはまた改めて。よろしいですわね！？」

そう言うとセシリアはシンと一夏の返事も聞かずに席へと戻った。シンも胸の隅に引っかかる事があったが、教師が来る前に席に戻り、授業開始に備えた。

「うるさい……………」

初日の日程を全てこなし、放課後。

シンは一夏と並んで寮へと向かっていた。……………後ろの女子の談笑する声に苛立ってはいたが。

「ははっ……俺はシンがいるから何とかやっていけそうだ」

嬉しそうに語る一夏。シンもそう言われて嬉しかったが、面と向かって言われると恥ずかしいものだった。

「よく恥ずかしげもなく言えるな。そういう事」

「照れんなって！」

シンは思った。やっぱり、平和はいいな。と……………。

その後、シンと一夏は自身の部屋へと向かった。因みに、シンは二人部屋を一人で使っている。通常なら一夏と相部屋になるのが妥当だが、全てがコンピュータで管理されているが故に、直ぐ部屋を変える事が出来ないのだ。

「と言うか……学生一人に与える部屋じゃないだろこれ……」

ふかふかのベットに、最新のパソコン。窓の外は絶景が顔を見せており、個室のシャワールームが備え付けられている。Z A F Tのアカデミーでさえこんな良い部屋は与えられない。いや正規の軍人、例えエリートの特典でも与えられないだろう。

「寝るか……」

時間的にはまだ早いが、昨日と今日の疲れでヘトヘトだったシンは直ぐにシャワーを浴び、布団へと潜った。布団の柔らかさと良い感じに火照った体によりシンは数秒もたたずに眠りへと落ちた。

———夢か現か……最後に女性の怒号と一夏の叫び声を聞いた様な気がしたシンであつた……。

PHASE 4 学園と入学と（後書き）

このシンはジ・エッジと酷似した世界のシンです。
俗に言うパラレルワールドです。

ジ・エッジと何もかもが同じと言う訳ではありません。

誤字脱字、指摘などお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9639r/>

IS インフィニット・ストラトス ～運命の紅い翼～

2011年11月14日18時37分発行